

フィンランドの保育における共生の現状：幸福の国で親になる移民

三井真紀

Real conviviality of Early Childhood Care and Education in Finland: live as the parents of the emigrant for the country of the happiness.

Maki Mitsui

1. 問題

フィンランド共和国は、フィンランド語で、スオミ (Suomi) と表記される。その意味は「森と湖の国」である。名前の通り18万の湖が点在し、森には白樺、松、トウヒが茂る。長い冬を挟んで、四季折々の自然が森と湖に豊かな恵みをもたらしている。

フィンランドが、世界に大きく注目されたきっかけは、2000年のOECD学習到達度調査 (PISA) で世界一の成績を修めたことであった。最近では、国連調査「世界幸福度ランキング」で2年連続世界一となったことが記憶に新しい。「幸福」のヒントを探ろうと、世界各地からの視察もあとをたたない。

日本で「フィンランドの保育はすごいんですね？」と尋ねられることが多い。フィンランドを理解すればするほど、その複雑さを説明するのが困難になり答えに躊躇してしまう。優劣という物差しで、日本とフィンランドの保育を比較することもできないし、日本の保育のきめ細やかさは各国の研究者から定評がある。しかし一方で、保育における共生の原理を読み解くうえでは、フィンランドの保育現場や移民コミュニティに出会うことに大きな価値を見出している。そこには、フィンランドがもつ「子どもは宝」「すべての子どもに等しい学びを」という信念や、長い時間をかけて、性別、年齢、出身、言語、信仰、健康状態を問わず、誰もが平等であることを強調した原点に触れる時間があるからだ。これらが、Grant & Ladson (1997) の「多様性 (Diversity)」は、人種的、民族的、ジェンダー、経済的集団、言語、宗教、能力、年齢、性的嗜好性などの属性についても尊重され、論じられるべき」という議論に通

じるものであり、議論よりはるか昔から続くフィンランドの生活実態であることも興味深い。

保育という現象を通してフィンランドを見渡す場合、制度や利用者の平均値を取り出すのみでは、子どもの生活世界を知るには限界がある。大規模な統計調査の結果は興味深い、子どもの「まるごと」に立ち会うと、そこにいる人々の体温や、人々の接触によって現れる化学反応を間近で知ることができる。このことは、共生の原理の理解に不可欠である。とりわけ移民の子どもの育ちは、親の持つネットワークが、保育生活や学校生活に密接に関連し影響を与えている。多様な人々の「あいだ」で行き来する子どもの様相を、研究者の感性をもって分析することは意味あることであろう。フィンランドにおける「保育のリアル」に寄り添い、目を凝らすことが、本研究の意義であり目指すところである。

2. 目的と方法

本稿は、保育という現象を、フィンランドの移民家族の子育ての文脈を通して分析することを目的とする。報告は、2019年3月から2019年8月に実施された4週間の現地フィールドワークの記録を、エスノグラフィーの手法をもちいて分析した。ここでは、移民家族の「フィンランドで暮らし親になる」プロセスを辿ることを手がかりに、多文化共生社会と保育の間に存在する「接点」や「ねじれ」について明らかにする。なお、プライバシー保護の観点により、文中の人物名は仮名とし、年齢や職業や出身地等の属性は、論旨に影響を及ぼさない範囲で最小限の記

載にし変更している場合がある。文中では、カースルズとミラー (Castles & Miller, 2011) の移民過程論を参考に、「移民」を「文化間移動をし、現在フィンランドに定住している(または定住を進めている)人」と定義して用いた。

3. 結果と考察： フィンランドの保育における共生の現状

(1) パイヴァコティ (Päiväkoti)

① フィンランドの保育利用

フィンランドでは1973年に「保育法」が規定されて以降、パイヴァコティ (Päiväkoti) が国の保育を支えている。直訳すると「昼間の家」であり、ここは日本の保育所・幼稚園・こども園に相当する保育施設である。パイヴァコティは、多くが公立で、乳幼児は親の育児休暇がおわる1歳頃から6歳までを過ごす。フィンランドでは、伝統的に多くの家族が核家族・共働きであるので、保育施設の量的な充実が重要な国や自治体の役割となってきた (Kela, 2019)。その結果、現在は基本的に待機児童問題を回避しており、移民家族で失業中であっても、入園することが可能である。フィンランドの移民に限って言えば、母語のパイヴァコティや民間サービスを利用した保育を受ける場合もあるが、大多数は自宅最寄りの公立園に通園する。

保育現場において、集団の中で子ども一人一人が自己を発揮できることや、主体的に活動が展開される環境構成であることは、フィンランドや日本に限らず、多くの国で重要だと認識されている。しかしながら、その方法論と実践については、様々である。以下は、幸福の国フィンランドにおける移民の語りである。そこには、複数の目を通して見えたフィンランドの保育があった。

② 保育者は何もしていない？

フィンランド在住アジア人家族との集まりで「フィンランドの保育者は余裕がある」という話題になった。それはポジティブな評価であるが、すこし角度を変えると「(子どもと一緒にいるが) なんだか何もしていない」とやや批判的な声に変わる。実際、調査者が参与観察をする中で、保育者が自ら積極的に遊びに交わり、走ったり歓声を上げたりして盛り

上がっているところを一度も見たことがない。また、保育室の片隅でコーヒーを飲みながらインタビューに答えてくれたことも一度や二度ではなかった。保育者は、一般的な保育室では、保育時間中の自由あそびの時間は部屋のどこかに静かにたたずみ、子どもの様子を見守っている。過去の調査 (三井, 2016) では、フランスやドイツから移住した家族が「Finnish style is just playing…」(「フィンランドの保育って、ただ遊んでいるだけだから…」) と、保育者の提案がないことに物足りなさを感じ、保育施設を開設した例もあった。では、フィンランドの保育者は本当に何もしていないのだろうか。

A氏 (アジア圏出身) は、フィンランドの園生活について次のように述べている。

遠足の準備をしてくだささいというお知らせがきます。でも、先生から服装や持ち物の具体的な指示がないときがあります。自由でいい反面、説明がないので戸惑うときもありました。しかし今は、困ったら自分から聞くようになり、想像する力もつきました。

B氏 (タイ出身) は、自身の幼少期の経験と比較して驚いたことを次のように話す。

フィンランドの保育現場では、先生が大きな声で子どもを叱ったり、注意したりするというところを見たことがありません。そもそも、子どもが多少騒いでも「子どもは騒ぐものだから」と抑制したりしないところがいいと思いました。

後日、2つのエピソードをフィンランドの保育者数人に紹介したところ、返ってきたのは「お知らせを読んで困ることは人によって違います」「必要なことは親自身が考えて質問してくるでしょう」「子どもは、大人が離れることで、自分の行為に気が付きます」「あわてて大声で叱ると、子どもが驚くし、大人も大きなエネルギーを使うことになります」「子どもは気が済むまで騒いだら、自分から騒ぐのをやめます」等の回答であった。つまり、それらの実践はフィンランドではごく一般的であることが推測できる。これに関連して、小学校低学年クラスで教鞭をとるフィンランド人C氏は、次のように話した。

海外から来る視察の人たちから、フィンランドの教師が思ったよりもクールだとか、静かで喋らない（指導は最小限）と言われることがあります。「それなのに子どもが主体的になるのは興味深いです」と評価されることもありました。でも、私たちが口出しをしないからこそ、子どもは育つという考え方ができませんか？

そして、人権との繋がりについて次のように説明してくれた。

子どもの権利を守ることはもちろん大事です。でも同時に、大人にも権利があることを忘れてはいけません。最大の権利とは、教師が自分の生活を大事にすることです。無理をして体を壊してまで働くとか、自分や家族の時間を犠牲にしてクラスの子どもの優先することは正義ではありません。仕事と私生活の時間やエネルギーのバランスをとることが、フィンランドでは重要な専門性の一つです。

このような説明を聞くと、過去のエピソードとの共通点が見出される。

例えば、2019年3月に訪問したヘルシンキ市のD小学校で、調査者が見学した4年生の授業のことである。教師が、蚊の鳴くような声なのである。同室のアシスタントに「なぜあんなにか細い声なのか」と尋ねた。すると「わかってやっているといます」と説明してくれた。つまり、子どもは教師の声を聞き逃したら次が分からなくなることを理解していることを想定し、おしゃべりをせず話を聞かせる戦略だろうということである。そして「結果的に、教師も自分が疲れなと思います。大きな声を出す元気がないのでしょ」と話してくれた。

このようなスタンスは頻繁に聞く。あるときは「今年は、先生が〇〇をする余裕がないから、このクラスでは〇〇活動はしません」という連絡メールを見せてもらった。自分ができないことを迷わず発信している事実は興味深い。しかし本来、個々の経験や能力に違いがあることは当然である。組織が個を尊重し、活動が進められていることが推測できる例である。稀にそのような状況にクレームをつける者もいるそうだが、基本的には「人権」という視点に立ち、先生側も主体として尊重される。

多くの小学校の空きスペースには、ソファが設

置されている。「高学年のたまり場になるのでは？」と心配する親をよそに、実際は低学年の子どもの「休憩」に利用されることが多いという。疲れたときには自分で気が付けること、きちんと休むこと、気持ちをリフレッシュさせ次の授業に入ることが、体験として大切にされている。



写真1. 一般的な保育室の様子



写真2. 廊下の休憩用ソファ

フィンランドの保育現場（教育現場）を初めて目にする人に映る姿は「(指導すべき立場なのに)何もしていない」様子かもしれない。しかし、別の視点から観察を続けていると、そこには主体としての大人が、主体である子どもを対等に導くという一つの実践方法が確認できる。つまり、子どもの権利と大人の権利が存在することを可視化したこれらのやり取りは、意味ある方法論と捉えることが可能となる。それは、フィンランドで最も大切にされている‘自己決定’という価値観にも直結するものである。フィンランドで移住後、保育現場を通して社会との接点を見つけていく家族は多い。最初の小集団の在り方を通して、新しい価値観に出会いながら人生の最も濃密な数年間を送ることが想像された。

(2) 家族のなかの子ども

移民家族に対し「フィンランドで子育てをして良かったですか」と尋ねると100%「はい」と回答が得られる。この質問はインタビュー調査の中で必ず項目に入れている。「はい」と答える背景には、いったい何があるのだろうか。

今回、ヘルシンキ在住のE氏（アジア圏出身）も「フィンランドで子育てをして良かったですか」「はい、もちろんです」と即答し、続けて次のような話をしてくれた。

もしも自分の出身国で子育てをしていたら、考え方も人間も違っていたと思います。とにかく、子育てができてよかった。子育てを、みんなが働きながら当たり前に行っているから（働きながらの子育てが一般的だから）、思い切りできた。この国で本当に良かったです。

こう話すと、すべてのお子さんの育児休暇を取ったこと、出身国にいたらこんな風に子どもとかわかっていなかったらどうかを述べた。インタビューの最後に「フィンランドに来て、人間的な生きかたができています」と振り返り「夏休みにたっぷり遊んだり、自分や子どもの体調が悪くとき休んだりできています。こういった当たり前のことができる環境が大切だと気が付きました」と語った。

移住して数年のF氏にも話を聞くことができた。

私には子どもはいませんが、フィンランドには、夫（フィンランド人）の家族と兄弟と、その子どもたち（乳幼児期の姪や甥）がいて、時々会います。驚くのが、親が子どもを叱っているところを見たことがないことです！もちろん、何かトラブルがあれば「ああ、これはこうしたほうがよかったね」とか「こんなになっちゃったから片付けようか」ということはあります。でも、その時にも、静かに諭すというか…話しかけるように子どもに伝えています。小さい子どもがいると、大人が四六時中ガミガミいうのかな？と思っていたので、びっくりしました。最近、このほうが子どもも嬉しいし、大人もストレスが減るんだろうなと考えるようになりました。

F氏は、いずれ自身が子育てをすることがあったら、こんな風に穏やかにありたいという。それは、

多くのフィンランド人家族をみても感じることでありと話してくれた。たとえば公の場で子どもが多少騒いでいても、親が止めようと慌てる様子はみられないという。何より、周囲の反応がとても寛容だと語る。調査者も、駄々をこねたり、機嫌が悪く泣き出したりする子どもには何度も出会った。しかしどの場面でも、大声で叱りつけたり、周りの人に子どもの状態を謝ったりする親は皆無である。

ある時、トラムの中で、生後間もないであろう乳児が泣きだした場面を見た。ベビーカーの中で泣きじゃくる乳児に対し、母親はベビーカーを覗き込み、子どもの耳元で「いい子だね…シー…シー…」と静かに繰り返していた。「これで泣き止むのだろうか？」とっていると5分程で乳児は泣き止み、何事もなかったかのように家族はトラムを降りた。この話をフィンランド人の母親・父親らと話題にしたところ「フィンランドではそういう感じだと思います」とか「私もよくやりました」「抱き上げたりしません」「慌ててゆすっても、何も解決しないでしょう」という意見が続いた。つまり、そのようなかわりはごく一般的だということだった。

F氏は、話のおわりに「将来、自分たちが子どもを育てることになるかもしれません。そのとき、フィンランドで子育てするのが本当に楽しみです！」と付け加えた。移住後、このように言い切れる背景がたいへん興味深い。子育てを続けるE氏と、結婚し家族になりたてのF氏の目を通し、フィンランドの子育てが未来へ再生産される実態を確認した。

4. 考察：幸福の理由

(1) 主体的に「がんばらない」

フィンランド在住20年のある日本人が「フィンランドに移住するということは、長い旅行をすることと質的に大きく異なる」と話してくれた。日本とは食生活も気候も違う北国で、たいへんなエネルギーが必要だったという。しかしそのような時、周りのフィンランド人に「がんばりなさい」「まだ努力が足りない」などとは一度も言われなかったそうだ。このことは幸いだった、と振り返る。誤解を恐れずにいうならば、フィンランドには主体的な「がんばらない」が存在していることが示唆できる。「がんばらない」を大事にする個人的価値観を基盤にして成長

したとしたら、大人になって子育てや保育の中で「がんばらない」をすることは当然である。そして大人の「がんばらない」は、子どもの発達段階にそぐわない「がんばり」を期待しない子育てや保育へと連鎖する。

価値観とは、人生に大きく影響を与えながら、絶えず変化していくものである。祖父江（1997）によれば、人には「異なった文化のもつ慣習」に対する反感の感情があり、その先に「共感はないが共存は認める段階」があり、さらに「共感を抱く段階」が続くという。そして、異文化に対する態度の中で「共感」を抱くときが、人が真に安定した状況であることを論じている。移民家族の価値観は、フィンランドに暮らす中で、個々のやりかたで変化を続けていく。その時に「がんばり」を期待されない環境が、多くの移民にとって「共感」を抱かせている可能性が高い。双方に、助けた、助けられたという感覚はないかもしれない。しかし「がんばり」を期待されない空間は、時に心地よく、受け入れやすく、移住者の自己内省の時間に関与していると推測される。

本調査では、フィンランド移住者の保育現場や家庭生活を巡るプロセスを通して、フィンランドにおける異文化接触のパターンや、「がんばらない」をする人々の背景の一部が明らかとなった。「がんばらない」周辺にある、ゆるやかな保育や家庭生活は、結果として子どもの「見えない力」を待つ、重要な保育原理との重なりと捉えることができた。

2017年に、日本の保育・幼児教育の新しい方向性が示されて以来、それぞれの思いや願いをもつ保育・幼児教育関係者が分かりあい、互いの保育観ををぶつけ合いながら保育を洞察することがますます期待されている。しかし、そこで大前提となることは、保育は、子どもが主体であるという点である。大場ら（1997）は、「保育の真実は、子どもの保育の中にしかないのに、中には特定の理論や方法への興味が優先して対象である乳幼児の立場に立つということが見失われているものが多い」と保育の課題を語っている。フィンランドの保育は、保育理論や保育方法がたいへん見えにくい。しかしながら、長く観察を続けると、子どもに過度にかかわらない自由度の高い環境構成や、子どもの権利を尊重した（しようと皆で意識して努力している）保育が見えてくる。その傍らに、保育者が自身の権利をもち、寄り添っていることも重要なポイントである。もちろん、そ

のような事例をもって安易に「フィンランド・メソッド」と呼ぶようなことは避けなければならない。一方で、フィンランドの保育の在り方が「保育は子ども主体」ということを再認識できる場であることは間違いない。

フィンランドの難民シェルターで働くフィンランド人G氏は、イスラム教徒とキリスト教徒の神との接し方の違いについて話してくれた。「イスラム教は、神様は偉大すぎて近寄れないものと考えられているようです。人によっては怖い存在のようです。でも、キリスト教では、神様は人々と共にあり、許しを与える存在です」と話を切り出した。シェルターで働くと、難民として迫害をうけ、苦しい経験をしたイスラム教徒にたくさん出会うという。人々がクリスチャンに触れる経験は、1つの大きな転機であり、子育てにも影響があることは間違いないと語った。そして「フィンランドでは、無理をすることが大事ではないと話します。怠ける日があっても大丈夫。フィンランドの神様は許してくれる、とシェルターでは伝えていきます」と話してくれた。

主体的に「がんばらない」人々に囲まれ、移民家族がどのように異文化接触をうけとめていくのか、保育実践の特色と原理はなんであるのか、引き続き分析していきたい。

(2) 共生社会＝ありのままを認める土壌

鯨岡（2010）は、保育の場や家庭において、子どもの存在を認めることの重要性を「自分の言うことを聞くから認める、自分に望ましいことをするから認める、能力的に高いから認める」というような条件付きの『認める』ではなく、1人の子どもがこの世界に現にこうして生きているということ、存在しているということは無条件に肯定してかかることが大切」と述べた。子どもの断片的な行動に目を向け、その行動の良し悪しを考える危険性に言及し、一個の主体として認められ、いろいろな心をもった主体として丸ごと認めることが重要だと説明した。乳幼児期から繰り返し身近な大人に認められる経験を経た心は、他者への信頼感を持ち持続できる強い心に成長する。フィンランドの保育や親子関係の文脈を通し、鯨岡の思いと重なる「権利をもつ主体としてのありのままの営み」を確認することができる。

フィンランドの保育者H氏（アジア圏出身）は「Ihmiset ovat erilaisia（人は、みんな違う）」とい

うフレーズをあげた。そして、フィンランドでは保育現場で頻繁に使うフレーズであること、幼少期からこの言葉を聞く環境にあると自分にも他人にも権利があることを理解すると話してくれた。さらに「自分と誰かとを比較したり、優劣をつける習慣がなくなるのではなか」と話す。したがって、幼少期からのこの習慣は、多文化共生社会において、大切な要素の一つだと話してくれた。

保育者は、乳幼児が自ら考え、決めて起こす行動（それは「やらない」という選択肢も含めて）に、当然違いが表れることを理解したい。保育施設において、他者の行動の多様性を見聞きしていく体験が、それぞれの「ありのまま」に意味があり、尊重すべきだと体得できるプロセスとなるからである。

フィンランドの保育施設では、昼食時には2歳児くらいから、自分でその日の献立をチェックし、食べる種類・食べられる量を選択する練習を重ねることが多い。保育者の中には「いろいろな種類の食べ物に挑戦しましょう」「食べられる量を考えてください」とアドバイスする者もいるが、基本的に子どもに指示はしない。そこには、共生社会に配慮する徹底した「見守り」が行われている。日本の保育者にありがちな‘野菜を沢山採る子どもは優良’‘バランスよく食べることが何よりも大切’という価値観や評価もない。そこは、自分の選択の意思が尊重される場であり、幼くても人権が守られている一場面である。

街角に点在するカフェには、夕方、親子連れが簡単な食事をするために立ち寄ることが多い。仕事を終えて疲れた親は、無理をして食事を作ることを選

ばない。親子共にリラックスして食べることを優先する。そこには、そういったことに批判的な家族や友達、店のスタッフや客の様子もない。親の権利を見守る社会の在り方が反映されている。日本人経営のカフェには、夕食前に海苔巻きを買って帰ったり、軽食をとったりする親子の姿が頻繁にみられる。



写真4. 近所のカフェで食事をする家族

子ども理解をする上で重要な視点について、森上(2015)は、肯定的な「まなざし」を向けることが、ありのままの自分を安心して発揮できるようになる第一歩だと論じている。この理論は、現場における〔大人-子ども〕の関係性だけではなく、〔フィンランドの人々-移民〕の関係にも十分に当てはまるものであろう。移民一人一人に向けられた周囲の温かな信頼や関心は、その「まなざし」から伝わっている。ありのままを發揮できる環境には、そのような周囲の「まなざし」があり、フィンランドの街角には「まなざし」のヒントが点在している。

5. まとめ：保育における共生に向けて

2016年夏、ヘルシンキ中央駅で、南ヨーロッパから鉄道で渡ってきたであろう数名の難民が、警察官と話していた。傍らには、人権保護団体のメンバーらしき2人が様子を見守っており、それを遠巻きにする鉄道利用者の視線があった。あれから同じような光景を複数回目にしながら、フィンランドが初めて経験する新しい局面を理解した。多文化共生の実現への道のりは始まったばかりであり、長いことは



写真3. 保育園の給食

確かである。

現在、「文化」や「社会」の示す範囲は多様化している。「文化」や「社会」で一括りにすることのできない、子どもや家庭の現状は保育現場でも日常的に存在する。フィンランドの保育現場も例外ではない。

大谷（2017）の調査では、移民の増加するフィンランドの市立図書館の取り組みが報告されており、多文化共生の課題が乳幼児期から青年期にわたって続く様子がわかる。今、どのような方向をもってフィンランドが変化していくべきなのか議論が続いている。

2019年5月、日本国内最大の保育研究の場である「日本保育学会」が東京で開催された。大会委員長である岡健は、『こどもの・保育者の・保護者の・人びとのいきる現実』に目を向け、多様性の原則やその豊かさに目を向けた上で『新しさ』とは何か、質の向上とはなにか、を思索する場としたい。それが、本大会への私たちの願いでした」と述べた。

今、日本の保育現場の共生の課題は、移民家族の増加と比例するだけではなく、個々の生活背景や雇用の問題、多様な生き方の選択肢と重なりを持ちながら複雑さを増している。そのことに、日本の保育界全体で取り組もうという姿勢が確かに見えている。そのためには、佐藤（2009）も指摘するように、子どもの生活に応じた支援の理解が不可欠であろう。「外国人の子どものとらえ方の転換」や「子どもの生活世界を視野に入れた支援」の学習が保育学の研究者にも必要である。共生社会の解釈の仕方も重要なポイントとなるだろう。

幸福の国フィンランドの語りを通し、子どもが、その時代、その社会によって提供された空間を「よりよく生きる」ことの課題と可能性が示唆できた。多文化共生時代の困難さの原因を掘り下げ、未来への可能性に光を当てる実証的研究を再考したい。

謝 辞

本研究は、JSPS科研費（JP24730715）採択課題「フィンランドにおける多文化保育の研究－移民の子どもと生活世界」による研究成果です。ご協力いただきましたフィンランドの保育関係者、子育て家族、ルーテル学院の皆さまに感謝申し上げます。また、現地で研究を支援して下さったT夫妻、共同研究者、そして多彩なネットワークと励ましで応援してくれたフィンランドの友人に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Castles, S. & Miller, M.J. (2009). *The Age of Migration: 4th Revised*. Palgrave Macmillan.
- Grant & Gloria Ladson-Billings. (1997). *Dictionary of Multicultural Education*. Oryx Press. pp.248-249.
- KELA (フィンランド社会保険庁公式ホームページ). 最終閲覧日2019年9月20日. <http://www.kela.fi>
- 三井真紀. (2016)「フィンランドにおける多文化保育の研究－子育てをめぐるパラダイムシフト－」『九州ルーテル学院大学VISIO』46, pp.1-9.
- 岡健. (2019)「大会レポート」『日本保育学会会報』175, 一般社団法人日本保育学会, p.1.
- 大場幸男・森上史朗・中田カヨ子・山内昭道他. (1997)『保育原理』教育出版. P3.
- 大谷杏. (2017)「フィンランド公立図書館における移民対象イベントの成立要件：エスボー市立図書館で開催されている各種イベントに着目して」『都留文科大学研究紀要』85. pp.165-182.
- 齊藤ひろみ・佐藤郡衛. (2009)『文化間を移動する子どもたちの学び 教育コミュニティの創造に向けて』ひつじ書房. pp.16-17.
- 祖父江孝男. (1997)「異文化リテラシーと異文化間能力」『異文化間教育』56, p.11.